九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『お気に召すまま』の森 : その役割と意味

道行, 千枝
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/6788280

出版情報：九大英文学. 41, pp.1-13, 1998-12-15. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

"Much matter to be learned": Arden's Multiple Meanings

『お気に召すまま』の森－その役割と意味

道　行　千　枝

シェイクスピア喜劇において森は問題や混乱が解決される場であり、劇中人物は無秩序な社会から森に逃れ、そこを通過したのち平和を取り戻した社会に再び帰って行く。『夏の夜の夢』ではアテネ近郊の森の中で人間と妖精はしばしの間同じ時間を共有するが、オベロンの計らいで全てが円満に解決されるやいなや、人間は森という妖精の世界を後にして市民生活へと戻る。同じく森が登場する喜劇作品に『ヴェロナの二紳士』があるが、ここでもまたミラノ郊外の森を舞台にプロチュースとヴァレンタインの和解と二組の結婚の約束が取り交わされ、劇は大団円を迎える。これら二つの作品において森はいずれも人間の一時的な避難所であり、彼らの本来の居住地として扱われてはいない。しかし『お気に召すまま』の場合には、爵位略奪の罪を悔いたフレデリックと皮肉屋のジェイクイズは森を最終的な棲家として選ぶ。登場人物達が皆宮廷に戻って行く場面において、あえて森に残る異分子の存在を挿入することにより、シェイクスピアは森を臨時的な避難所として扱うだけに留まらず、人間と森とのより密接な関係を追及しているのかもしれない。なぜフレデリックとジェイクイズは森に留まるのか。森での生活を選ぶ彼らの意図を考慮しつつ、『お気に召すまま』においてシェイクスピアがアーデンの森にいかなる役割を与えようとしたのかを推察してみる。

1.森に残る二人の隠者

オーランドーの二番目の兄ジェイクイズ・ドゥ・ボイスによってフレデリ

ックの改心と森への隠遁が知らされる(5.4.154-157)[1]。フレデリックはアーデンに身を隠す兄の元公爵を討とうと軍を進めるが、森の端で出会った隠者に諭されて改心し、罪を悔い改めるために森での隠遁生活を選ぶ。自ら進んで森の生活を選んだとは言え、フレデリックの選択は半ば迫られたものに見える。というのも仮に宮廷に留まったとしても、一度謀反を起こした者は常に警戒の目で見張られるため、彼が再び宮廷で安定した地位を確保することは期待できそうにないからである。元反逆者に平穏な生活を保証してくれるのは宮廷よりもむしろ森であるのだ。従ってフレデリックの隠遁は自主的というよりも状況上やむを得なく選んだ道であったと言えよう。一方もう一人の隠者ジェイクイズの選択は完全な自由意志によるもので、彼は森に留まる理由を次のように述べている。

JAQUES　　Out of these convertites
There is much matter to be heard and learned. (5.4.179-180)

この選択についてロザリー・L・コーリーは "Jaques has retired to the forest in disappointment with the world's offerings."[2]と述べ、ジェイクイズの森に残るという行動が彼のメランコリックな性格から生まれる厭世思想が原因であると考える。このように最終幕でのジェイクイズの振る舞いは幸福な結末を受け入れることが出来ない彼の悲観主義から生じるものだと解釈されがちである。ジェイムズ・スミスはジェイクイズが主力な登場人物たちのグループを離れてフレデリックを追う訳を以下のように見ている。

> His [Jaques's] reason, rather than to learn, is to avoid learning. He quits the court for the monastery much as amateur students, threatened with the labour of mastering a subject, abandon it for the preliminaries of another—usually as different as possible.[3]

ジェイクイズの隠遁生活を選ぶという行為が諦めもしくは逃避として消極的

に捉えられる根拠として、彼がメランコリックな性格であるという言及が劇中で繰り返しなされていることが挙げられる。しかしながらジェイクイズが塞ぎ込むばかりでなく興奮しはしゃいだ態度を見せることもあるという事実を忘れてはならない。デヴィッド・ヤングはジェイクイズの消極的とは正反対の活動的な側面に着目し、彼が実際は最も熱狂しやすい性質であると指摘している。

> His [Jaques's] melancholy must not be taken too literally because it is in fact an enthusiasm. No one has more zest for life than this declared solitary.[4]

ジェイクイズの積極的な行動の例として、ヤングは二幕五場で彼がアミエンズに歌をせがむ場面を取り上げている。そこでジェイクイズは精力旺盛なイタチさながら熱烈に歌を聴きたがるのである。さらにタッチストーンについて語る度に有頂天になり、オーランドーやロザリンドに積極的に近づいて議論を持ち掛けるなど[5]、時折ジェイクイズは憂鬱者には無縁の活力を見せる。アグネス・レイサムは拗ね者のジェイクイズが実は孤独を嫌う寂しがり屋である点に着目している。

> He [Jaques] prefers to talk, if only to a herd of deer (II i) or listen, if only to a fool's soliloquy (II vii). He would be much at a loss without society. . . . He has a kind of sub-acid geniality and a deep curiosity about people.[6]

このようにジェイクイズの精神状態は興奮と憂鬱との間を行ったり来たりするのである。彼が森に残るのはその悲観的な性格がもとであると理由付けるのは、ジェイクイズの性格分析を基にしたひとつの解釈であろう。しかしここではジェイクイズの隠遁を彼の性格の観点から見るというこういった従来の方法を取らずに、隠遁を決意する際のジェイクイズの言葉をテクストに書いてある通りに評価したい。つまりジェイクイズは改心した謀反人とその追

従者達から宮廷社会では得られないものを学び取ろうという具体的な目的意識のもとに行動するのである。このジェイクイズを中心に、劇中人物の森に対する姿勢を分析することにより『お気に召すまま』において森がどのような存在であるのかを検討したい。

2. Robin Hood の森の現実はいかに

アーデンについての最初の言及は力士チャールズによってなされる。彼は森の中に逃れた老公爵達の生活ぶりを「ロビン・フッド」や「黄金郷」に喩えて説明する。

> CHARLES They say he [Duke senior] is already in the forest of Arden, and / a many merry men with him ; and there they live like / the old Robin Hood of England. They say many young / gentlemen flock to him every day, and fleet the time / carelessly, as they did in the golden world. (1.1.109-113, underline added)

森に逃れた老公爵は策略渦巻く宮廷に比べれば自然の厳しさは心地よく感じられると言って森での生活を称え[7]、またアミエンズの歌 (2.7.175-194) は老公爵の胸の内を代弁するかのように偽りに満ちた人間社会を糾弾する。しかし亡命者達は本心から森の暮らしに満足しているのであろうか。実はそうではないということが老公爵の台詞の端々から見て取れる。飢えたオーランドーが一行の食卓に乱入する場面で、老公爵は部下にこう諭す。

> DUKE SENIOR Thou seest we are not all alone unhappy. (2.7.136)

「我々だけが不幸なのではない」という言葉は「我々は不幸だ」という考えが前提となっている。この一言から、一行の暮らしが実際にはロビン・フッドのように陽気なものではないということが明らかになる。さらに老公爵は

森の生活が実は苦難に他ならなかったことを最終場で告白している。

DUKE SENIOR　And after, every of this happy number
That have endured shrewd days and nights with us
Shall share the good of our returnèd fortune
According to the measure of their states. (5.4.167-170, underline added)

森での生活は老公爵達にとって苦行であり、全てが解決した暁に、もはや宮廷社会に帰ることに躊躇する者はジェイクイズを除いて他には誰もいない。では一人だけ異なる決断をしたジェイクイズは森をどのように捉えているのであろうか。

3. 宮廷の制約と森の自由

森は獣の領分であり人間はみだりにそれを冒してはならない、というのがジェイクイズの意見である。彼は鹿狩りをする老公爵達を批難して、森の住民を殺す強奪者呼ばわりする。

FIRST LORD　Thus most invectively he [Jaques] pierceth through
The body of country, city, court,
Yea, and of this our life, swearing that we
Are mere usurpers, tyrants, and what's worse,
To fright the animals and to kill them up
In their assigned and native dwelling place. (2.1.58-63)

川崎俊彦はこの台詞をヒントにして「ジェークイズはエリザベス朝期の自然保護主義者（コンサヴェーショニスト）なのである」[8]とコメントしている。確かにジェイクイズは文明社会を嫌い、自由で野生的なものを好む。根本的に宮廷社会の価値観を保

持し続けている老公爵にとってこのような心情は不可解であり、彼はジェイクイズの解せない言動を訝しむ。

DUKE SENIOR I think he be transformed into a beast,
For I can nowhere find him like a man. (2.7.1-2)

森という自然の中に放り出された亡命者達の中で最も活発に行動するのはジェイクイズであり、仲間のもとから一人離れて瞑想にふけると思いきや、タッチストーンやロザリンドとの接触を試みたり、と忙しく立ち回る。森は気難し屋のジェイクイズをこれほどまでに有頂天にさせる影響力を持つ。彼は言動の自由を得るために道化の身分を与えて欲しいと願う(2.7.44-61)が、本人は自覚せずとも実は森という宮廷の外の世界において既に身分的制約から解き放たれているのである。その証拠に森の中でジェイクイズは宮廷社会の主従関係に縛られることなく、主君に向かって毒舌をほしいままにしてもそれに対して制裁が加えられることはない。

次に、ジェイクイズの羨望の的である道化タッチストーンが森に対しどのような見解を見せているのかを参考にしてみよう。二幕六場で彼はロザリンドとシーリアに従わされてアーデンの中に足を踏み入れながら森に対する最初の感想を述べている。

TOUCHSTONE Ay, now am I in Arden; the more fool I.
When I was at home I was in a better place; but
travel- / lers must be content. (2.4.14-16)

タッチストーンは快適な宮廷をわざわざ後にしてまで不便な森の生活を選んだ自分の愚かさを悔やむ。「森に入る者は何たる大馬鹿」という彼の意見は二幕六場のジェイクイズの台詞の中で反復されている。

AMIENS What's that 'ducdame'?
JAQUES 'Tis a Greek invocation to call fools into a circle.

(2.6.54-55, underline added)

“circle”つまり魔法陣とは世俗から隔離された聖域であり、この場合はアーデンの森を指す。ジェイクイズは宮廷生活を捨てて不自由な森にやって来た老公爵一行を馬鹿呼ばわりして皮肉っているのである。しかしこの馬鹿者達のなかに彼は自分自身を数え入れてはいないようだ。というのもジェイクイズはタッチストーン及び彼に同調するであろう老公爵のように“When I was at home I was in a better place”とは考えていないからである。否応なく旅人の生活を強いられ宮廷に未練たっぷりのタッチストーンとは対照的に、ジェイクイズは進んで旅人になりたいと願い、その為に安住の地を失うことさえも意に介さない。彼はロザリンドに愚かさを指摘されるが、その主義を変えようとはしないのである。

ROSALIND　A traveller! By my faith, you have great reason / to be sad. I fear you have sold your own lands to see / other men's. Then to have seen much and to have noth- / ing is to have rich eyes and poor hands.

JAQUES　Yes, I have gained my experience. (4.1.20-24)

地位や名誉、財産と引き換えにしてまで経験を重んじるジェイクイズに対し、森の生活は宮廷では得られない経験と自由を与える。最終的に森の自由を選ぶか、もしくは宮廷の規律と秩序を選ぶか、すなわち森に留まるか否かの判断は登場人物それぞれの一任に委ねられている。そして大半が森を去って行く結末から明らかなように、宮廷の価値観を携えたまま森に入って来た者にとって、戻るべき所はやはり宮廷社会なのである。

4. 宮廷人 Touchstone と自由な旅人 Jaques

これまで述べてきたように、森と宮廷に関してジェイクイズは他の登場人物とは異なる独自の認識を示している。宮廷社会の礼儀作法を世辞や追従で

あるとして非難し、人に礼を言うことにさえ不承不承なジェイクイズ（2.5.21-25）は宮廷社会の因習に批判的である。しかしながら一方で彼はタッチストーンの宮廷風の機知に感嘆し、道化の鋭い言葉によって汚れた世界を一掃することができると考える。

JAQUES Invest me in my motley. Give me leave
To speak my mind, and I will through and through
Cleanse the foul body of th'infected world,
If they will patiently receive my medicine. (2.7.58-61)

ところでタッチストーンに対するジェイクイズの心酔はそもそも誤解から生まれたものである。ロナルド・マクドナルドは二幕七場でジェイクイズがタッチストーンの時間についての言及を "a sincerely offered philosophical statement about life" と思い込んでいたく感激する場面を取り上げ、そこがジェイクイズの独り合点によって喜劇的効果がもたらされる箇所であると分析している[9]。ジェイクイズは誤ってタッチストーンを自分と同類と見做し共感を抱く。ところが実際二人は根本的に全く違う価値観の基に動いているのである。その違いはそれぞれの宮廷及び森に関する言及に現れている。タッチストーンは森にいながらも根本的には宮廷人であるというアイデンティティーを崩そうとせず、宮廷への未練を捨て切れない。羊飼いコリンから田舎暮らしをどう思うかと問われて彼はこう答える。

TOUCHSTONE Now
in respect it is in the fields, it pleaseth me well;
but in / respect it is not in the court, it is tedious.
(3.2.16-18)

タッチストーンはさらに五幕一場でウィリアムを相手取り、宮廷風の気取った話術を多用して田舎者の無骨さを笑いものにする(5.2.45-52)。田舎の生活に不満なタッチストーンとは対照的にジェイクイズは宮廷生活を名残惜しむ

こともなく自由な森の生活を満喫している。旅人の生活を進んで選び、経験という目に見えない富を得ようとするジェイクイズと、宮廷での既得の地位に固執するタッチストーンとの間には大きな価値観の隔たりがあることがわかる。

ジェイクイズの思惑に反し、タッチストーンは世間を部外者の立場から嘲笑しつつも最後には自ら結婚という手段でもって社会の枠内に収まってしまう[10]。その途端にジェイクイズはタッチストーンを見誤っていたことを悟り、道化に寄せていた期待と好意を放棄する。最終場でジェクイズが新郎タッチストーンに送る祝福の言葉は皮肉に満ちている。

JAQUES And [I bequeath] you to wrangling, for thy loving voyage
Is but for two months victualled. (5.4.186-187)

最終幕において喜び勇んで宮廷へと戻るタッチストーンとは反対に、ジェイクイズは「気取った宮廷(“the pompous court”, 5.4.177)」を捨て、森での隠遁生活に新たな希望を抱く。それまでは人間に隠れ家や自由を与える影響力が強調されていたアーデンの森が、最終場面において「隠遁の場」というもう一つの役割を備えて観客の前に提示されるのである。

5.森と隠遁

『お気に召すまま』に比べて種本であるトマス・ロッジの『ロザリンド－ユーフュイーズの黄金の遺産』(*Rosalynde or Euphues' Golden Legacy*, 1590年刊行)では、「隠遁」というテーマはほとんど強調されていない。追放された公爵と臣下達が森で亡命生活を強いられているという設定は種本にも見られるが[11]、それを膨らまし作中にわたって広く展開させたのはシェイクスピアである。マルコ・ミンコフの指摘によると、ロッジが『ロザリンド』を当時流行していた牧歌のジャンルに沿って展開させている一方で、シェイクスピアはその牧歌的要素を削り、老公爵達の亡命生活の場面を増やすことによって『お気に召すまま』を種本とは異なる色調に仕上げている[12]。シェイクスピ

アは最終幕で森に残る者が登場するという筋立てを加え、森と人間との関係をロッジの作に比べてより深く追求している。『ロザリンド』ではフレデリックに相当するトリスモンドは兄公爵との戦闘の末死亡し、改心の機会さえ与えられていないが、シェイクスピアはフレデリックを悔い改めさせ、ジェイクイズを森に残すことによって「隠遁」のテーマを作中に導入した。最終幕でアーデンの森は亡命者達の一時的隠れ家としての機能を失う変わりに「隠者の棲家」という役割を与えられるのである。

森は現実に隠者の籠る所とされることがあったが、ジョン・フランキスによると'Arden'という名はとりわけ「隠遁」と結び付けられることが古くからあったようである。

> The earliest literary references to Arden appear in Anglo-Norman texts . . . from the twelfth and thirteenth centuries, and it is striking that they associate Arden with one or both of the motifs, the recluse and the supernatural. . . . (underline added)[13]

'Arden'という名がエリザベス朝の人々にとって古くから「隠遁」と関連付けられ馴染み深いものであったならば『お気に召すまま』におけるアーデンの森も、その名前からして「隠者の森」であると連想されたことであろう。もちろん劇中のアーデンを「隠者の森」という一つの役割に限定することはできない。しかしながら最終幕において森は世捨て人の棲家としての存在意義がはっきりと強調されているのである。シェイクスピアは森と「隠遁」というテーマの伝統的結びつきを意識していたのかもしれない。

6. Arden の中の二重構造

A. スチュワート・ダリーによると中世及びチューダー王朝期において'forest'という言葉は今日よりも広い意味を持っており、木が生えている土地に限定されずに野原や荒地を含む耕されていない土地一般のことを言った[14]。シェイクスピアは『お気に召すまま』において'forest'を「未耕作の土地」という本

来の広い意味で使っている。Forest of Arden は大きく分けて老公爵達の隠れ住む'wood'とロザリンド達の'pasture'という二つの異なる世界で構成されている。そしてフレデリックの突然の改心が起こる場は'wood'に差し掛かる所である。

JAQUES DE BOYS　And to the skirts of this wild wood he
[Frederick]　came
Where, meeting with an old religious man,
After some question with him was converted
Both from his enterprise and from the
world. . .　(5.4.154-157, underline added)

アーデンの森の中でも老公爵一行の'wood'の場面は質素な亡命生活のイメージが主立って沈んだ雰囲気であるのに対し、ロザリンド達の'pasture'の場面は牧歌的雰囲気に包まれ、C. L. バーバーの言う「お祭り気分」[15]の陽気な開放感に満ちている。この二つの空間を比べてみると'pasture'では宮廷の要素が色濃く感じられ、一方'wood'は自然の現実的な厳しさが強調され宮廷社会からすっかり遮断された別世界であるという印象を持つ。'pasture'では宮廷の慣習がそのまま維持されている。例えばロザリンドはオーランドーに宮廷風恋愛作法の手ほどきをし、シルヴィアスとフィービーは恋愛詩そのままの恋遊びを繰り広げる。社会的身分は逆転されることなく、王女達はコリンを下男に雇い自らは羊の飼育に手を汚すこともない。一方'wood'では季節の厳しさと飢えの苦しみが登場人物の口から訴えられ、現実的な森の生活が描かれている。作中の森は宮廷社会に対峙するものとして表象されているが、その森自体の中にも二つの世界の対照が見られる。自然界よりも宮廷社会により多くの共通点を持つ'pasture'の領域は森の中における宮廷の縮図と見なすことができるであろう。そうであるとすれば、森本来の性質を反映しているのは現実の森の野生が描かれている'wood'の方であると言えよう。

登場人物の中で'wood'と'pasture'の両方を行き来する者はジェイクイズとオーランドーのみであるが、その二個所を比べた上でジェイクイズは隠者の棲

家たる'wood'を最終的に選ぶ。五幕四場でロザリンドは一同を森の中のある場所へと呼び集め、そこに老公爵一行もオーランドーに導かれるままにやって来る。老公爵達は隠れ家たる'wood'から出て結婚式に参列するのだから、最終場面の舞台設定が'wood'でないことは明らかである。それでもなお観客はフレデリックとジェイクイズによって森の中にあるもう一つの世界－世捨て人の棲家となる'wood'－の存在を認識させられる。シェイクスピアはアーデンを当時流行の牧歌のイメージ一色に染め上げるのではなく、伝統的でより現実味のある「隠者の棲家」としての森の機能を強調することによって作中の森を重層で深みのあるものに仕上げたのである。

『お気に召すまま』において森は単なる場面設定の道具として使われているのではない。登場人物達はアーデンに関して多種多様に意見を述べるが、それぞれの見方によって森はその都度異なる側面を見せる。すなわち、老公爵にとっては厳しい自然を、タッチストーンには粗野な田舎生活を、ロザリンドには「休日の陽気な気分」"holiday humour (4.1.63)"を、ジェイクイズには自由と経験を与える場となる。このようにアーデンの森は登場人物に応じてその姿を自在に変貌させる、多様性に富む存在なのである。

注

1 『お気に召すまま』からの引用ならびに行数表示はすべて *William Shakespeare*： *As You Like It*, ed. Alan Brissenden (Oxford： Oxford U.P., 1993)に拠る。

2 Rosalie L. Colie, "On *As You Like It,*" in *The Pastoral Mode*, ed. Bryan Loughrey (London： Macmillan, 1984), p.200.

3 James Smith, "'As You Like It,'" *Scrutiny* vol.IX. no.1. June 1940, p.14.

4 David Young, *The Heart's Forest*： *A Study of Shakespeare's Pastoral Plays* (New Haven： Yale U.P., 1972), p.57.

5 恋愛詩を書くオーランドーをジェイクイズはやっかみ交じりに皮肉り、自分はロマンチストな愚か者とは相容れないと言うが、にもかかわらず彼は迷惑顔のオーランドーを追って会話を続けようとする(3.2.245-)。また男装のロザリンドにも面識を求めて積極的に話し掛ける(4.1.1-)。このようにジェイクイズはアミエンズの歌から生気を吸うのと同じく、若者からもエネルギーを吸収しようとして彼らを追い回す。

6 Agnes Latham, "Satirists, Fools and clowns," in *Shakespeare*: *Much Ado About Nothing and As You Like It*, ed. John Russell Brown (London: Macmillan, 1979; rpt. 1986), p.208.

7 "DUKE SENIOR . . . Are not these woods / More free from peril than the envious court? (2.1.3-4)"

8 川崎寿彦『森のイングランド－ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』(東京：平凡社, 1987；rpt. 1997), p.177.

9 Ronald R. Macdonald, *William Shakespeare*: *The Comedies* (N.Y.: Twayne Publishers, 1992), p.100.

10 この点に関し、上野美子は『シェイクスピアの織物』(東京：研究社出版, 1992)の中で「もともと道化のよってたつ基盤は、アクションに参入せぬアウトサイダーであることだった。結婚という行為は、社会規範のなかに組み込まれ、インサイダーになる証しにほかならない。結婚を選びとるタッチストーンは、道化であることを返上するように見受けられる。」(p.91)と評している。

11 Cf. Geoffrey Bullough ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* vol. 2. (London: Routledge and Kegan Paul, 1963), pp.143-266.

12 Marco Mincoff, "What Shakespeare Did to *Rosalynde*," in *Twentieth Century Interpretations of As You Like It*, ed. Jay L. Halio (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968), pp.98-99.

13 John Frankis, "Magic and the Recluse in Arden: Shakespeare's Precursors in the Forest," in *Shakespearean Continuities*, ed. John Batchelor, Tom Cain and Claire Lamont (London: Macmillan , 1997), p.9.

14 A. Stuart Daley, "Where are the Woods In *As You Like It?*", *Shakespeare Quarterly* 34. (1983), p.174.

15 C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy*: *A Study of Dramatic Form and its Relation to Social Custom* (New Jersey: Princeton U.P., 1959, rpt. 1972)